

## 特 別 講 演

### 筑紫の古代文化について

—昭和30年5月28日(土) 土木学会通常総会において講演—

長 沼 賢 海\*

#### THE ANCIENT CULTURE OF TSUKUSHI

—This Paper was Read at the General Meeting of JSCE., Held on May 28 th 1955.—  
(JSCE Oct. 1955)

*Kenkai Naganuma*

**Synopsis** The ancient culture of Tsukushi, the northern Kyūshū has its origin in the communication first opened between the China continent and Japan. This fact is significant for studying the activity of the ancient Japanese.

The present paper deals with the politics and system in that era, mainly on the basis of the Japanese history prior to *Shōtoku-taishi* (573~621) being supplemented through presumption, with the data appeared in the historical accounts of the China continent. The description herein also touches the civil engineering work for national defense in that era.

**要旨** 筑紫すなわち北九州の古代文化は日本が始めて大陸(中国)と交通したことによつて起つたもので、古代日本民族の活動状況を知る上に重要な意味を持っている。本文は聖徳太子以前の日本歴史を主として大陸側の歴史書に現われたものから客観的に推測し、当時の政治及び制度を述べたものである。なお当時の国防のための土木工事にも触れている。

特別講演というといかにもむつかしそうであるが、実はそうでもなく、皆さんがせつかく博多にお集りになつたのであるから、お土産に博多織、博多人形などを、お持ち帰りになるうと思う。そのお荷物のはしへ入れてお帰りを願う話を申し上げたいと思う。

さて、この頃の学校で用いている国史教科書は、われわれが学校で教わつた本にくらべると、いちじるしい相違がある。現行のものは、古い本のおよそ聖徳太子以前を全部削除してある。そして考古学的考察による民族の原始時代から始まつて、石器時代、古墳時代へと発展する段階を説き、そして民族の結束、古代国家建設の初めを説いて、聖徳太子時代に達するようになつている。ゆえに天照大神も、神武天皇も、仁徳天皇も、神功皇后も史上にその影を見ないのである。その理由は、従來の聖徳太子以前の歴史は日本書紀によつてゐるが、同書は伝説を書いたもので歴史ではないからである……。これは表面の理由に過ぎなく、どこの国の歴史もまず伝説によつて始まつてゐる。これは日

\* 九州大学名誉教授 5

本のみではないのであつて、歴史でない伝説だから捨てて顧みないでよいという理論は成り立たず、この国史の大改訂には、ほかに深遠なる意味があるのである。

私は今日、これを問題にして皆さんの批判を仰ごうとは思わない。むしろ日本書紀を離れて、中国(中華民国)の歴史を見る日本歴史によつて、日本の開元を説こうとするものである。ここで云う開元は日本紀にあるように、神武天皇の即位をもつて日本史の紀元とする、日本国の開闢とするという意味ではない。日本が中国の歴史に出て来るということは、日本が東洋中心の世界史の一環として、名乗りをあげることである。それをいま、日本の開元と申すのである。その当時の日本は北九州に限られ、年代を経るに従つて中国人の考えた日本、すなわち世界史の一部となつた日本が漸次東に拡がり、聖徳太子の頃には大和を中心とするおよそ全日本に及ぶのである。ゆえに北九州の古代史は九州の郷土史であると同時に、全日本の歴史の起りでもあるといわねばならないであろう。

大陸及び半島と交通し、大陸文化の影響を早く受けたものがまず立上り、文化を向上発展せしめ、民族活動の中心となつたのであるから、民族の一般文化の点から考えても、北九州はその中心でなければならぬ。

このように重要な意味を有するこの地方の歴史を、およそ聖徳太子の国家建設の開始、天智天皇の同事業の促進の頃に至るまでを、もつぱら大陸との交渉と関連して説明するものである。それを今度の集会の記念

品としてさし上げたいと思う。

後漢書によれば、後漢を興した光武帝の中元2年(56年)に倭の奴の国王が、光武の朝に進貢して倭奴国王に封ぜられ印綬を賜わった。天明3年志賀島(福岡県粕屋郡、福岡市の対岸)において発見された金印の印文には漢の倭の奴の国王とあり、まさしく光武帝に賜わったそのものである。奴の国の意味をまず説明しなければならぬ。わが古典には北九州地方に奴という地名はない。日本書紀には博多の津を隰津または娜大津とある。魏志は国語のナを常にヌとしている。博多の周辺を那珂と云った。天智天皇は磐瀬の行宮を改めて長津の行宮と称せられた。長は那珂から起つた名であろう。奴国は隰国であり、しからば隰の意味はというと隰の意味は浦の意である。浦とは海岸の部落である。村と判然区別する場合がある。壱岐国には村がいくつ、浦がいくつと云う、村は海をもたぬ部落である。出雲風土記には浜と浦とを区別して、浦とあるところには、そこに泊りうる船の数を注記してある。つまり船の出入するような浜の部落を浦とある。現在でも浦をナと称する所がのこつている。対島の北端釜山に対する港、佐須浦を佐須奈とも云う。壱岐の国府の浦すなわち郷ノ浦を郷奈と云う。コウあるいはゴウの津の例は他にもある。越後の国府の近くに郷津があり、相模の国府に近く興津がある。長崎県佐世保の南部及び広島県(宇品の近く)に日宇那があり、これらの地名のナもまた同意味の名であろう。古語について考えると、僧行基が開いた瀬戸内海の五泊の一つ播磨に魚住泊がある。「魚これをナと云う」と日本書紀に二度まで注がある。今も岩魚と云う。しかし魚住の名は魚の意でなく、浦の意であろう。魚住の住は積であろう。山口県に近世まで有名であつた海駅に室積があり、日本書紀には館をムロツミと訓んだところがある。室は倉庫の意で、海駅に設けられた物資の蓄積庫である。瀬戸内海沿岸には室と云う地名が多く、古の室のあつた遺址である。播磨の室津は特に名高く広島県、山口県の海岸にも室と云う地名がある。こう考えて来ると魚住のナは浦の意、スミはツミで物資の蓄積を意味する。魏志に見える女王国の内外にあつた多くの国々の名には何々奴国と云うのが非常に多い。姐奴国、華奴蘇奴国等々であり、女王国の境界の尽きるところには単に奴国と云うのがあつた。けだし海国筑紫にあつて魏人の見聞に入つた国々は、多く浦であつた。実はこうした浦々が集つて海国が成立していたのである。これら諸浦の中において中心をなし、中国及び半島との往來の起点をなしていたのが博多地方であつた。この推定を決定的ならしめたものは、かの漢倭

奴国王の金印が志賀島から発見されたと云うことである。ある学者は奴国王が死んだのでその金印を志賀島に隠匿したと云う。それはこの島の博多湾岸一帯における重要性をわきまえない説である。前に述べたとおり、志賀島の海人名草と称する者が、神功皇后征韓の伝説に現われており、少童三神の鎮座の島でもあり、また中世になつても上方の寺社の花園でもあり、弘安4年に侵寇して来た蒙古の大軍も橋頭堡をこの島に築かんとした。中世になると中国に通うような大きな船が博多湾内を碇を下しうる唯一の海域は、この島の内側(南面)にあつた。こうした要衝に当る島であつたから、奴国王が死んでここに葬られたのであろう。後世金印発見の地に碑が建てられ、これを印塚と云い、印塚の上辺は狭いけれども谷あいをしており、人を葬る余地はある。西歴一世紀前後の墓はまだ簡単であつた。金印はその副葬品であると想像される。また今も湾岸には福岡市の内外に名島と云うところが2箇所もあり、すぐ近くには奈多と云う海岸部落もある。奈多のタは博多のタと同様場所の意である。隰の大津を大織寇(鎌足)伝には娜大津とある。太は大の意に用いて津につけたのではなく原本にはナタと傍訓がしてある。後漢の光武帝の朝に入貢した奴国は隰大津を中心とする博多湾岸一帯を含む浦、すなわちナであつたと推定してまず間違ひはなからう。魏志の奴国は3万余戸とある。対島国が1000、壱岐国が3000、来盧国が4000、伊都国が1000、不瀾国が1000とあり、投馬(三瀨)と、邪馬台とが7万余戸とあるが、これは多くの国々の集合体の国名であろうから、前記の国々の戸数と比較して云々すべきでない。すると奴国は断然戸数が多く、幼稚な都市国家の容相を呈していたらしい。

そうだとすれば博多の起原が遼遠の昔にあることを知る。もちろん奴国は大陸半島からの航路の最終点で、主としてこの方面から、彼の国々へ、彼の国々からこの地方までの往來があつたのである。魏志の倭国の地理の正確なのは対島から奴国、不瀾国に至る間であつたのも偶然ではない。

わが古代文化の反映である記紀等の神話もこの方面において最も早く発達したと愚考する理由の一つはここにある。少童三神、筒男三神出現の神話は両三神鎮座の根本の神社がこの地方にあるのも、故あることである。

倭国が後漢の朝に往來すること数十年つづいたようである。その後西歴三世紀の中頃までには北九州の諸部落が統合し、卑彌呼と云う女性が倭女王となつた。この形勢は日本国を通じて起つたもので、日本民族の

結合結束に向つて大きく動いたのである。それは北九州だけでなく、九州南部がまとまつた熊襲の国となり、山陰、北陸方面が出雲国となり、大和中心地方が大和国となつたのであろう。そしてこれら、地方的に大きくまとまつたものがさらに大きく一つに結束されるのである。日本書紀には神武天皇東征と云う伝説となつて後世に伝えられるのである。北九州は当時まだ中国人の知つていた日本の全部であつて、これを倭国と云い、魏の朝廷へ入貢したのが女王卑彌呼であつた。ここで問題にしたのは、女王のいた耶馬台国の位置と、卑彌呼と云う名称である。耶馬台はヤマトを音訳したのである。ヤマトは山が両側から通つて門をなしているところをいう。一転してそれがその門の内部の広い範囲を含む地域の地名となるのである。中央の大和の名の起りも全く同様である。九州のヤマトはそのまま漢字の訓をとつて山門と書くが、中央では倭字を用いた。これに敬称の大字をつけて大倭と云い、奈良時代に倭を和と改めたのである。単に漢字の訓を用いたのではない。わが上代における漢字の用い方の一つの方法である。機氏と云うべきことを、機を家業とした帰化中国人が、秦の始皇帝の子孫と云つたところから、機の代りに秦の字を用いて「ハタ氏」と云つた。「アヤ氏」を漢氏と書き「ナラの京」を平城京と書くのも皆同じ方法である。ヤマトと云う地名は、日本のごとき山国では「外にもたくさんあるべき地名」である。女王のいたヤマトすなわち耶馬台は筑後の山門郡と考えるのが、魏志の日本地理に最も合致するところである。ところが学者の中には大和のヤマトであり、自然、女王を神功皇后であろうなどと云う者がある。しかし女王が筑後地方においては海岸地方の統治に不便であつたから、伊都に大率を置いたと魏志にあり、この伊都の大率を考えれば、耶馬台国すなわち大和であると云う説は自然に解消するはずである。魏志に女王が伊都国に大率を置いて檢察し、諸国これを畏憚し、国中を治してあたかも刺史のごときものがあつたとある。これを後世大和朝廷が置いた太宰府に比較してみれば、自らその意義も性質も分明にならう。伊都国について魏志に世々王有り、皆女王国に統績し、郡使往来して常に駐る所とあるから、ときには魏が朝鮮に置いた帯方郡の郡使もここに往来していたことになる。そしてもし女王国が大和にあつたとすれば、太宰の伊都国の役所は大化改新の太宰府と全く同じようなものと思わなければならぬ。紀元2,3世紀の頃、大和朝廷が仮に体系の備わつた国家を中心として存在していたとすればその出先機関である伊都の太宰が、魏の郡使と交際し、往来しておらなければならぬ。そして太宰が獲

得した大陸文化を、中央大和に運ばないはずはない。しかして記紀にこれが認められるような、なんらかの史実があるのであろうか？ 全く見られない。2,3世紀の頃、大和朝廷が北九州を統率し、外国と交際する機関を筑紫に置いたとはどうしても考えられない。このことだけでも女王国の存在は大和にあり得ない。つぎに卑彌呼の名の意味につき愚考を述べたい。

卑彌呼は魏の景初2年(238年)に入貢している。三国史の新羅本紀には新羅阿達羅王の20年(173年)に卑彌呼使を遣はして来朝すとある。また晉書には女王の晉の秦始(秦始3年が267年)の初め通訳を重ねて人貢すとある。この3人のヒメ子が同一人であるとすれば、その間約100年にわたるということはある得ない。晉書や三国史が誤りであるとすればそれまでである。このことに関し三国史は魏志を参考にしてはいないようであり、卑彌呼を畢彌呼と同音異字を用いており晉書は卑彌呼としている。わが上古男性の名の下に子のつく例ははなはだ多く、まれに女性の名の下に子をつける例もあり、雄略の期に引田部赤猪子(古事記)欽明の朝に青海夫人勾子という者がある(日本書紀)。平安時代になると貴人の女性の名には、子をつけることが多く行われている。

卑彌は姫であらう、「ヒ」も「コ」も美称であり、尊称であるから、卑彌呼は個人の名ではなさそうである。隋書には卑彌呼の呼を略して卑彌とあり、梁書には卑を略して彌呼とあるところもある。前者は姫に当り、後者は「女子」と云うに当る。隋書も梁書も、唐の初めにできたものであるから、その頃になると卑彌呼の意味が正しく解されて、卑彌または彌呼となつたのであろうか、おそらく卑彌呼は女王の敬称であつたのが、あたかも個人名のごとくに伝えられたのであろう。一般的な尊称名であつたとすれば、卑彌呼の名が100年にわたつても不思議はない。とすれば倭の奴の国が後漢に入貢してから100年後の頃から女王国が起つて約100年ばかりつづいたと考えられる。自然奴の国と女王国との間の空白も解消されるのではあるまいか。

女王国のあとを受け、北九州の統治者として男の倭国王が5代つづくのである。それは5世紀の初めから同世紀の終りに至る約100年の間のことである。以下倭王5代の大勢について語らう。

後漢三国のあとに晉が起り、久しからずして宋が起り、そのあとは南北朝時代といつて、中国の南部と北部とに多くの王朝が興亡した。南朝は齊、梁、陳、隋とつづいた。倭国王は北朝には入貢せず、もつぱら南朝の国々にのみ入貢している。これは北朝は塞外民族

の国で中国の正統の王朝でないと考えたからであろう。それらの倭国の名は譚, 珍, 濟, 興, 武の5名があげられる。この倭王の命名のしかたは, 当時中国で行われた一般の風を模したものである。西陽王尙(南朝宋の王室)常山王遵(北朝の魏の宋室)等きわめて普通の例である。入貢の倭王が中国風の氏名を称えることは珍らしくない。遣隋使小野妹子が, 素(蘇)因高と称したことは有名である。

異称日本伝にはこの譚珍以下の倭王を大和朝廷の代々の天皇等にあて, 無理な説明をしているが, その説を現在でもまだ踏襲している学者もあり, それは多く耶馬台国すなわち大和朝廷と解する人々である。

5代の最後の倭王武は宋の順帝の冊封を受けて, 「使持即都督, 倭, 新羅, 任那, 加羅, 秦韓, 慕韓六回諸軍事, 安東大將軍」に叙せられた。倭王武の上記のごとき武略活動は彼の祖譚が宋朝に入貢したとき以来のことで倭人が後漢, 魏, 晉に入貢した時代とはいちじるしい変化である。倭の王が半島侵略の裏付史料として三国史記の新羅本紀において多く発見することができる。それにもまして有力なる根拠となるものは, 高麗の好太王碑の文に, 倭が辛卯年海を渡つて百済を破つたとある。その辛卯(391年)の年は倭王譚が始めて入貢した宋の創業の主, 武帝の永初元年(420年)よりおよそ30年ほど前のことである。筑紫の豪族が軍国主義的となり, 半島侵略を開始したのは, この頃であろう。以後梁に至るおよそ百余年間5代の廷はそれぞれ中国に進貢している。

次に漢史にいう東夷のうちで, 倭, 百済, 高麗の三国が南北朝に入貢した事情を考えたい。北朝へは倭王は入貢していないから, もつぱら南朝について考える。三国のうち最も勢力のあつた高麗は宋へは入貢すること17,8回に及び, 齊, 梁, 陳に至つて少しも衰えていない。すなわち齊に2回, 梁に10回, 陳に5回, 百済は宋に7回, 齊に1回, 梁に6回, 陳に6回に及んでいる。新羅は宋及び齊に入貢せず, 梁に1回, 陳に至つては3回に及んでいる。南史外国伝新羅の条に「その國小にして自から使聘すること能わず」「梁の普通2通年に, 王姓は募, 名は泰, 始めて百済の方物を奉獻するに随つて使せしむ」「語言は百済を待つて後通ず」などあり, 新羅の勢が盛んになるようになって南朝に入貢することも多くなつたのである。かくのごとく半島の三国は南朝へ入貢すること漸次増加しているが, 倭王は宋に入貢した最後の武がわづかに齊及び梁の入貢度数が倭, 新羅, 百済, 高麗の国勢をはかるバロメーターであるとするれば, 倭王が漸次衰えたと考えなければならぬ。大和朝廷の勢力が, 九州に及ぶ歴史につ

いて考える。日本武尊の熊襲征伐, 景行天皇の筑紫巡幸等日本書紀に伝えられているが, いずれも伝説的なもので, ただちにこれを史実とは認めにくい。漸次朝威の西に伸びたことを反映していることは否めない。中哀天皇, 神功皇后の西征は皇后の征新羅は史実としては多くの疑問はあるが, お揃いで筑紫を経営されたことは香椎廟(香椎神宮となる)のごとき史蹟があり, 多くの地理的裏付けもあるから, これを否定できない。朝廷の勢力が九州に発展してついに半島や中国に往来していた倭王某等のごとき豪族の存在がゆるぎなくなつたのであろう。しかし上世以来の九州豪族割拠の形勢は急に止むものではない。東北地方でも蝦夷の経営は源頼朝の俘囚長藤原泰衡の平定までつづくのである。戦国時代まで活動した倭寇海商の徒は, 江戸時代になつて完全に亡くなつてはいない, 漂流者としてその一面を伝えている。江戸時代を通じ頻々として伝えられる漂流者の中には単なる漂流者ばかりでないことを, かつて論じたことがある。北九州の土豪である女王男王等のあとにも急には亡くならない。日本書紀によれば, 継體天皇の御代に, やはり筑後地方に割拠し, 武力を半島に用い, 朝廷の勢力に対抗したのが筑紫国造磐井であつた。

彼が半島を侵したことは旧事本紀の国造本紀によつて知ることができる。彼は間もなく平げられた。

大和朝廷の九州に対する発展は倭王代の頃から漸次盛んとなり倭王武の末年, すなわち5世紀の終り頃には, それが安定したのであろう。従つて半島の一部に対する大和朝廷の支配力も漸次上昇したと思われるが, なにぶんにもその支配力の基地が遠く大和に至つては, 多くの不便があり, 九州の旧豪族に代つて半島に対する上国の地位を維持することが困難となつた。

欽明天皇の朝に任那にあつた日本府が新羅のために亡ぼされた, 遺命あり, 聖徳太子は受けて半島における日本の勢力回復に莫大な力を注がれたが多く失敗に帰した。九州に太宰と云う官をおいて内外の政治軍事を司らしめたごとき, 同胞弟久米皇子を征新羅將軍として筑紫に派遣されたごときその一, 二の例である。太子の後を受けて勢力を半島につきこまれたのは中大兄皇子であつた。総じて半島大陸の形勢が外から日本国内政治に多大の影響を与えるのが常である。

聖徳太子の国家体系を整え始められたのも, 中大兄皇子の大化改新も皆海外からの影響が多分にあつたのである。

中大兄皇子は半島統治のために最後の努力として, 母斉明天皇を奉じて筑紫に出陣され, 天皇は朝倉の宮(朝倉郡甘木町の付近にあり)に, 皇子は博多にあつ

てもつぱら軍務を執られた。ときに唐は大軍を半島に送り、それが漸次南下する。新羅はこれと呼応して西進した。日本府の亡びた後は百済がもつぱら日本府の役を務め、わが国に誠忠を尽した。唐と新羅の連合軍が百済を攻め、王都泗沘(扶餘)は危からんとした。ここに皇子はせつかく準備された武力をあげて百済救援に乗り出された。さきに天皇は朝倉宮でおかくれになっていた。天皇は60才にあまる女性の天皇であつた。それをわざわざ皇子が九州まで同伴されたのは、よほどの決心であつたと思う。

日本の軍船およそ200艘、百済の白村江(錦江)を遡行して、白村江の中流に沿うていつた。泗沘を救おうとしたが、唐の水軍はこれを迎えんと同江口に布陣した。日本の軍船はこれを攻撃してかえつて全滅し、「海水為に赤くなつた」と伝えられる。

皇子はひとり筑紫ばかりでなく、四国水軍をも催されており文字どおり国をあげての戦いであつたことは元寇のときと同じであつた。

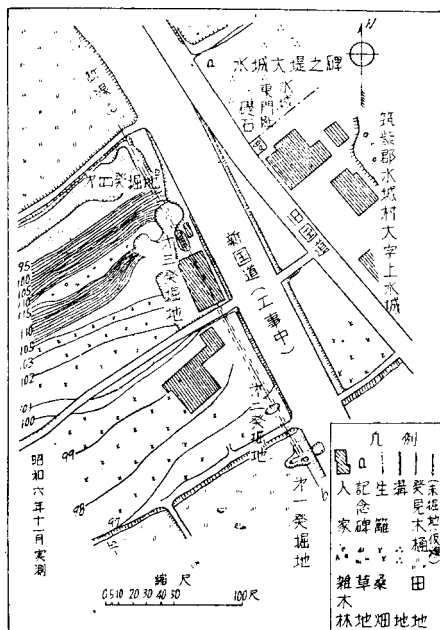
それだけに敗戦は悲惨であつた。しかし国の内外政治には非常な好結果をもたらされた。

戦後皇子は帰東されて天智天皇となられた。賢明な天皇はここで国策を根本から樹て直された。内には大化改新以来の内政を整え、民族の結束をはかられた。

かくして近江令という新憲法が生れた(後追々発達して大宝令となる)。対外的にも、九州土豪すなわち倭王代以来の対半島策を改めて、女王時代のごとく平和と外交に切りかえ、平和の使節を唐国に送つて、文化資料の輸入にこれ努められた。爾来文永、弘安に蒙古が侵入する頃まで、江戸時代の鎖国政策のごとく海外に出ることも好まず、半島に対しても事勿れ主義となつた。それだけ国防に全力を注がれた。実はこの国防事業のうちで、大野城(水城を含む)の土工及び石工について話すのが本講演のねらいであつたかも知れないが、時間の関係上きわめてあらましを述べるにとどめる。

文永、弘安の戦いに幕府は建治元年全九州に向かつて令を發し、明年を期して異国征伐に出陣しうる人勢、乗馬、武器、武具等に関する報告書を提出せしめた。そして出征を免された者には、その所領高に応じて、博多を中心とする海岸に防壘を建設する工事を命じた。勇士は出征する覚悟をもつて工事に献身した。天智天皇のときも永年にわたる海外出征の意気を励まし、精神を打ちこんで土工に力が尽された。単に土工ばかりならば、これよりさきに行われた仁徳天皇の御陵工事のごとき、大規模のものもないではないが、まず奈良京建設以前には、最大の工事であつた。大野城には、人為的なものを除けば、自然に壊れたと思う

図一 水城発見横樋道付近平面図



写真一



註：樋の入口の東南から見たもので十字形になっている。

写真二



註：十字になっている横樋の西半分を東から見たものである。横樋の東半分は新国道の下になっているから横樋の末端交柱の部分だけあつたにすぎない。

部分は1箇所もない。城の北面に最大の谷があり、そこには自然最大の排水路がある。それを塞いだ俗に云う百間石垣は高さ2,3間(目通り)もあるが、1箇所も崩れた所がない。水城の大堤も同様である。

これは地下工事に莫大な力を用いてあるからである。石垣の根は土を掘り下げ、捨石がたくさん詰めてある。城の東南面の通路、これを俗に水の手口という。その谷を塞いだ石垣で実験したことであるが、高さ3間くらいの石垣の根に不規則形の石をたくさん積み込んで、壁内の水はその石の間隙を潜つて流れる。そして石垣の根から4,5間も下つた所でようやく水が石の間に流れているのが見える。

これを土地の者はめくら堰と云っている。石壁の上方(内側)で雑木を切つて火をつけた際、煙が石垣の根を潜つて外へ吹き出たのでわかつたのである。

先年通路改修の際、人家をうしろに引き、井戸を掘つた際、堤防の地下に図で示したような樋を発見したのである。この種の樋は全堤防の地下に、いくつくらいあるのか想像がつかない。30間おき、40間おきに伏せてあろう。

もちろんこれは大堤の内側の水分を堤外に吸い出すとしたものである。

樋の上の土層は全部盛土であるが、柴と土を交互に重ね、堤防の頂上から下、10尺くらいまでに達している。

上述した百姓家を動かそうとして、堤防を削り取つた際、伏せた柴が黒く土を染めていたので、明瞭にそれが見られた。

堤防の根を地平線から3尺内外掘り下げると、水分の多いところからは、現色のままの柴の葉が出てくる。もちろん太陽の光線に照せば、ただちに変色して葉は灰のごとくになってしまう。

思うに200年にわたつて日本人が武力を半島に行使した終りの頃に絶大な唐及び新羅の武力に抑えられて、内外の国策は一回転した。

外に向かつて守勢的となり、保守的となつた。文永弘安の防壘は異国征伐の精神をもつて作られた。

大野城の築城もこの点似ている。

大野城は見たと勝負で設計されてはいない。見えない所に、見えない努力が集中されている。

◀著者紹介 明治16年新潟県高田市に生る。同41年東京帝国大学文科国史学科卒、同年文部省図書課教科用図書嘱託、44年文部省通俗教育調査会事務嘱託となる。大正4年東京府立一中教諭、同9年広島高師教授、同14年九州帝大教授となり法文学部国史学講座を担当、同学評議員を経て、昭和12年九州帝大法文学部長に任ぜられ、同19年九州帝国大学名譽教授の名称を受く。

現住所：福岡県筑紫郡太宰府町字三条

万能数表編集委員会編

## 集成 万能数表

A 5判304頁 上製函入 価380円 予50円【発売11月中旬】

### 権威ある数値表の集大成

本書は、従来個々に刊行されていたパーロー、チェンバー等々の数値表を基としてこれを集成し、実用に十分な範囲内で1冊に凝集させたもので、これさえあれば科学者・技術者が日常携わる各種の数値計算には遺漏のないことを確信しています。

【主な内容】 二乗、三乗、平方根、立方根、逆数、平方根の逆数、円の周と面積、自然対数表・常用対数表・常用～自然対数換算表・三角函数真数表・三角函数対数表・階乗表・二項係数表・指数、双曲線函数表・Gamma函数表・ $J_0, Y_0, J_1, Y_1$ 表・ $J_n, Y_n$ 表・ $J_{\pm(n+\frac{1}{2})}, Y_{\pm(n+\frac{1}{2})}$ 表・ $I_0, K_0, I_1, K_1$ 表・ $I_n, K_n$ 表・Legendre 多項式・Bernoulli 数表・楕円積分表・完全楕円積分表・楕円函数表・正規分布表・Poisson 分布表・ $x^2$ ・分布表・ $t$ ・分布表・ $F$ ・分布表・ $Z$ ・変換表・正規性の検定表・乱数表・特殊定数表・計量単位と換算表等。

工学博士 楠 宗道著【日本図書館協会選定図書】

## 水理学計算法

B 6判 196頁 上製函入 価280円 予40円

水理学の公式を使う煩雑な諸計算を整序・簡易化し計算能力の飛躍的な向上を図つたもので、特に実用を重んじ興味深く段階的に解明してあるから、大学生、中堅技術者の座右の書として書も好適である。

【主要内容】 水の物理的性質・静水圧・水の流れ・オリフィス・堰および切欠き・管・開渠・地下水・オイラーの運動式・波動・粘性・練習問題・附録諸表等。

### 近 横田周平著 緩流河川工法

刊 A 5判 288頁上製函入 価500円 予40円(11月初旬)

案 工学博士 橋本規明著 新河川工法(荒廃河川の処理)

内 A 4判 304頁 上製函入 予価 800円(12月初旬)

◎ 内容見本進呈 ◎

東京・神田小川町3の10 森北出版 K. K.  
振替 東京 34757番